



野崎京子著

強制収容とアイデンティティ・シフト

世界思想社 2007



本著の執筆の動機について、ある新聞に取材を受けたとき次のように答えた。

「アメリカ・カリフォルニア州生まれの私たち日系人家族は、1941年真珠湾攻撃から数ヶ月後、日系人集団強制収容所に入れられました……。戦後60年以上を経た今日ですが、「9・11」(アメリカ同時多発テロ事件)とその後の一エスニック集団への過激な反応などを考えると、「強制収容」が決して過去のものではなく、いつ同じことが繰り返されてもおかしくないという危惧を抱きます。ですから、自分たちや自分たちと祖先を共にする人々の歴史を語り続けることが大切だと思い、本書にまとめました。」

アジア系アメリカ研究者である筆者と日系アメリカ文学・文化研究とのつながりは、以上のような私自身の生い立ちにあるが、執筆に直接関与したのは貴重な資料を入手したことによる。以前から要請していた当時の記録である家族全員の WRA (戦時転住局) ファイルと父の JOD (司法省抑留所) ファイルが、ついに 2006 年 9 月ワシントン DC にある NA (国立公文書館) から送られてきたのだ。ここに保管されている、第二次世界大戦中 FBI や WRA によって作成された収容者の個人書類を当人もしくは家族が要請すれば、FOIA (情報行為の自由法案) の下に閲覧、取得することができる。日本であれば「情報公開法」にあたるこの法案は、公民権運動の中から人権を保障する目的で作られた。

送られてきた資料の中には、ショッキングなものもあった。たとえば、通常『マグショット』と呼ばれる警察などが撮る容疑者(父)の顔写真があり、その下には 10 本の指すべての指紋が捺されていた。Prologue-- 写真と証言で始まる本の構成は次の通り。

二つの文化に生きて：文学と事実のはざま
日系アメリカ人のあゆみ：歴史をふりかえる
日系人強制収容所で何が起きたか
様々な選択から時を経て

- 1 うわさとスパイ活動
 - 2 集団心理
 - 3 徴兵、忠誠心、市民権放棄
 - 4 帰米再考
 - 5 アイデンティティ・シフト
- 真実を求めて：公文書資料を読み解く
- 1 Redress 戦後補償運動
 - 2 NARA からのファイル

Epilogue

書名の「アイデンティティ・シフト」は、ブログの書評でも取り上げられたように、この本のキーワード。

車の運転でのギアシフトすることと重なる。ハイウェイでは、ギアをトップに「移行」し、道路状況に合わせて低速にシフトするように、日本やアメリカの国の状況や政策志向に自分の身をおいて、ギア・シフトなどの決定を自分でする。そしてその作業が比較的簡単に選択できる日米関係が現在ある。

「変わった日本人」であり、「異なった種類のジャパニーズ・アメリカン」である筆者は、「マイノリティの中のマイノリティ」として自覚している。その視点から「日本」と「アメリカ」を描いた。次代を担う若者たちに「真実の歴史」を見極め、国境にとらわれない人間交流の中から、日本での常識が「常識」でないかもしれないことを自覚し体験してほしいと願いながら。

(のざき きょうこ ノーマ 文化学部教員)



カット 井上 寛之
(理学部 3年次生)



小池和彰著 会计学・トピックス



創成社 2007

本書は、著者が、演習、いわゆるゼミで取り上げてきた財務会計のトピックスをまとめたものである。京都産業大学に奉職してから十数年が過ぎたが、この度、会計ファイナンス学科が新設されることになり、これを機に、財務会計のテキストをまとめてみた。

会計を研究することについて、世間の人達は、疑問を持っている気がしてならない。非常に残念なことであるが、会計を単なる計算としかとらえていない人々が、世の中に数多く存在しているのではない。

もちろん、そのような考え方は誤りであり、他の学問領域と同様に、もちろん会计学にも理論や議論がある。さまざまな議論があり、いろいろな見方や考え方ができるという側面が会计学にもあるのである。

英語に“フード・フォー・ソート (food for thought)”という言葉がある。様々な事を注意深く考えさせる何かという意味であるが、会计学トピックスが、会计学に関するフード・フォー・ソートになり、会计学に関して、さまざまなことを考えて、そして楽しむ、きっかけになってほしい、それが筆者の願いである。

筆者の学生時代と異なり、会计学は、格段に難しくなった。筆者が学生時代には、たとえば、税効果会計は、研究テーマではあったが、学習テーマではなく、また減損会計などは考えてもみなかった。また、会计学、とりわけ財務会計は、客観性あるいは確実性を重視し、過去志向の強いものであったが、最近では、主観性のある、未来志向の強いものへと変貌を遂げ、その様な傾向は、会计学の複雑性を加速している。

しかしながら、会计学の基本的な概念がまったく別物になったわけではない。財務会計の目的が株主や債権者などに対する情報提供にあること、保守的な経理、いわゆる保守主義が有用な概念であると考えられていること、利益計算が、費用収益対応の原則に基づき行なわれることなどは、現在も変わって

いない。

本書は、このような会计学の基本的な概念(原則)を用いて、教室でディスカッションができるように工夫された、まったく新しいタイプの会计学のテキストである。本書で取り上げてある、資産の評価基準、収益の認識基準、合併会計、減損会計、税効果会計、キャッシュ・フロー会計に、会计学の基本的な概念(原則)が頻りに登場し、楽しみながら、会计学が学習できるようにしてある。

本書には、×形式による単純な設問もあるが、会计学に関して、深く考えさせる設問も用意してある。たとえば、「時価会計は、仮定の世界の会計である、この言葉の意味を考えなさい」とか、「収益が通常販売時点で認識されるのはなぜか」とか、「法律である税法が資産性の乏しい繰延資産に積極的なのはなぜか」などの設問があるのである。

これらの設問の中には、京都産業大学における教室から、すなわち、筆者のゼミの学生との議論から、生まれたものもある。これまで筆者のゼミに所属してくれた学生達に、筆者は、本当に感謝している。最後にこれらの学生達にお礼を言って、このエッセイを締めくくりたい。

(こいけ かずあき 経営学部教員)



カット 井上 寛之
(理学部 3年次生)

初瀬龍平, 野田岳人編, 渡辺史央著



日本で学ぶ国際関係論

法律文化社 2007



本書は「国際関係論」の入門書として、授業でもに学ぶ外国人留学生と日本人学生が使用する目的で開発、作成された。

タイトルにある「日本で学ぶ」という言葉には、外国人留学生にとっては、母国の視点からいったん離れて、日本の視点から政治や国際情勢を見るといった意味合いがある。一方、日本人学生にとっては、留学生たちとともに学ぶことで、日本という国を客観的に見つめ直す機会となるであろう。

本書は4部構成になっている。少し中味を紹介する。第1部「政治学と国際関係論」では、政治学と国際関係論のイントロダクションを、第2部では、「日本をとりまく国際関係論」として、「日本の国際化と外国人」「日米関係と日本外交」「日本の戦争責任と東アジアの国際関係論」などを、第3部では「グローバル化時代の国際関係論」として「民族紛争と予防外交の国際関係論」や「エネルギー資源をめぐる国際関係論」「外国人法と市民社会」などを、さらに第4部では、「これからの国際関係論」として、今後も世界に影響を与え続けるであろう米国に光を当て「アメリカニズムと近代文明」などを、そして最後は「グローバル化の国際社会」としてその光と陰を追った内容でしめくられている。

私が担当したのは第2部第4章「アジアからの日本留学と日本語教育」である。執筆に至った経緯はあとで触れるが、私の専門でもある「日本語教育」は、その歴史を振り返ると、常に世界の国際情勢や政治的関わりの中で多大な影響を受け、ときには悲しい歴史を刻んだことは間違いない。

明治維新以降、近隣のアジア諸国に先駆けて近代化を推し進める中、アジアからの留学生を迎えるようになり、日露戦争時にはその数は約1万人にも上ったと言われる。戦時中には台湾、韓国朝鮮等において、同化政策の一環として日本語教育が強制的に行われ、アジア諸国の人々の母国の文化や言語を奪い、深く傷つけたという事実を忘れてはならない。

戦後は、日本が経済成長を遂げ国際的な地位を確立していく中、日本語教育も技術援助の一環として復活し、さらには国際交流の一環として拡充していくようになったのである。本章の後半では留学生自身が日本の大学および社会で体験する異文化に光を当て、現在日本企業で活躍している元留学生のエピソードを交えた。モデルとなったのは、本学出身の留学生である。この先輩留学生の話を読んで、自らの留学生生活の励みにしてもらいたいと考えている。

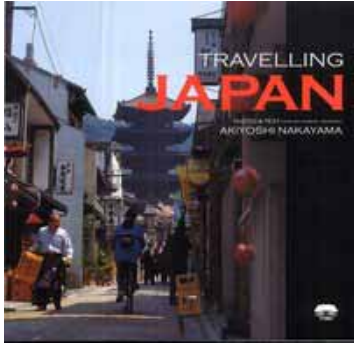
さて、作成時に、本書の編者の一人である野田岳人氏から声がかかり、日本語教育の専門家として日本語校閲を依頼され、研究会にも参加させていただいた。「国際関係論」といったフィールドの広さと深さ、研究者それぞれの個性と知見の豊かさを実感した。また、「世界の問題」はいかに多くて奥深く、これらをどう解決できるのか、日々、留学生と接している自分には何ができるのかと改めて問い直す機会となった。このたび、京都女子大学の初瀬龍平先生には、このような貴重な経験と執筆の機会を頂戴したことに改めて感謝したい。

本書ではできるだけ難解な用語や語句は避け、難しいものは本文に解説を入れた。また、日本語学習上の配慮から、日本語能力試験2級以上の漢字語彙にはルビ振りを施している。本書を通し、留学生と日本人学生が意見を交わし合い、互いに知見を広めることができれば幸いである。

(わたなべ しょう 外国語学部教員)



カット 井上 寛之
(理学部 3年次生)



中山昭吉 (写真・文)

TRAVELLING JAPAN

東方出版 2007



このたび紹介の機会が与えられた本写真集は、現役教員の学術書ではありません。また、西洋史研究者の私が日本を主題にした唯一の刊行物であるばかりか、「道楽の産物」に近いものです。それにもかかわらず、本集をこの〈連載〉に選定された図書館の意向を尊重し、思いつくままに語らせていただきたいものです。

私は、ナポレオン時代のヨーロッパ国際関係の研究を目的に、1960年代から80年代にかけて計3回、通算6年近くをヨーロッパ諸都市に滞在しました。ところが、飛行機事故を経験していたせいもあり、それ以降は日本に釘付け状態でした。したがって、親しくなった外国の友人とは疎遠になる日々が続きました。そうした事情で、せめて彼らに日本の近況を伝えたいと思いついたのが、本集刊行の主要な動機といえます。なお、かねてから自分流の写真作品を内外に発表したいという念願も、有力な原動力になりました。また、世紀と千年紀転換期の日本を記録したいという、歴史家らしい使命感も多大の役割を演じてくれました。

こうして、1990年代の中頃から約10年間、私はカメラを手にして日本各地を撮り続けました。その際、変化に富んだ自然景観、多神教的な伝統社会、それに東西混交の現代生活に直面し、望ましい日本像の構築に苦心したのはいうまでもありません。その結果、私は日本特有の「多様性」を基調にしたうえで、その「海洋性」と「超過密社会」にできるだけレンズを向けることにしました。なお、作風としてはこれまでと同様に、人物を配した浮世絵風の日常的な生活風景に焦点を絞るように心掛けたつもりです。

ようやく手にして頁をめくることが可能になった本集は、日中両国人向けには「紀行日本」を表題にしています。収められた作品は約150点にすぎませんが、その多くは現代日本を活写しようとしたものです。いずれにしても、限られた内容で世界の人々に説得力のある日本紹介を試みるのは大変です。そこで、多くの写真集にはない独自の編集方針のでぞ

もうとしました。その一つは、東京や北海道からではなく、日本を歴史の流れに沿う形で九州から北海道にかけて5地域に分け、それぞれの地域性をできるだけ反映させた点です。いま一つは、現代日本からの望ましい情報発信を最優先する立場から、カバーはもとより、全体を通して英・中・日の三カ国語併記にした点といえます。

幸いにも、本集は刊行直後から新聞・雑誌などでも予想以上の好意的な紹介記事を獲得できました。それらには中国語と英語でのものもあります。とはいえ、私の意図をもっとも適切に表現したものは『東京新聞』(2008年3月23日)「読書」欄の「……〈日本〉を過剰に装飾することも戯画化することもせず、日本人の誰もが目にしながら、どこか懐かしく、そして今風な平均的日本の姿がバランスよく映し出される。……」にほかなりません。

図書館や書店で手にしていただける本集は、当初は内外の異邦人向けに企画したものでした。とはいえ、日本人の国内探訪だけでなく、国際親善でも本集が貢献できれば無上の光栄です。

(なかやま あきよし 外国語学部名誉教授)



カット 井上 寛之
(理学部 3年次生)